

感覚環境のまちづくりフォーラム in 静岡市（平成 21 年 10 月 4 日（日））

事例報告「五感に楽しいまちづくりを訪ねて」

作家・五感生活研究所代表 山下柚実氏

こんにちは。山下「ゆみ」と申します。漢字は柚の実と書きまして、父が柚の香りが好きだったのでつけてくれた名前です。香りに関係がある名前の意味を、大人になるにつれ意識しております。

私は、環境省の「感覚環境のまちづくり」検討会の委員に、平成 18 年度から参画させていただいてまいりましたので、そのあたりのご報告と、それからお手元の封筒に入っている「感覚環境のまちづくり事例集」のご紹介をしたいと思います。これは 7 月末にできたばかりのグッドプラクティスを集めた事例集です。

「感覚環境」は新しい概念です。「感覚環境」を明確に掲げたまちづくりをしている事例はまだありません。しかし、先ほどの近藤先生のお話や、静岡市のいい感じサイトのように、そのような要素を持っている感覚資源は様々な場所にあり、それをまちづくりに活かしている事例も、彦根の NPO 五環生活を始めとしてたくさんあるわけです。

私は物書き業をしており、仕事柄、取材に慣れておりますので、今回の事例集作成に当たって取材を担当することとなり、全国各地 10 カ所を歩きました。今日はこのグッドプラクティスとしての事例集を参考にしながら事例を紹介しつつ、「感覚環境のまちづくり」とは何なのかについてお話しさせていただきます。

先ほど、近藤先生から自分の身体感覚から出発することが大切だ、というお話がありましたが、皆さんの中で、昨日の夜、空をご覧になった方はどのくらいいらっしゃいますか？昨日 10 月 3 日は中秋の名月にあたり、東京でもとてもきれいな月を見ることができました。

これは東京新聞の記事です。「中秋の名月に電気を消して月見をしよう」という呼びかけを東京都江戸川区が自治体として行い、一万個ものロウソクが配られたとのこと。感覚を働かせてみようという気運が高まってきているのかと喜んでいたところ、一方で、昨日の夕刊に、ショッキングな記事が出ました。「中秋の名月を知らない」という人が 20 代で 20%いるという記事です。これは、コニカミノルタホールディングスの調査ですが、516 人から回答を得た中で、中秋の名月という言葉そのものも知らないと答えた人が 1 割いたとのことで、中でも一番多いのが 20 代の

20%だったそうです。五感を使ってまちづくりをする前提として、各人が「感じる」体験がなければならぬとすれば、今後どうなっていくのか。若い人たちに五感を使ってもらうきっかけを作り出すことは今の時代、とても大切なのではないかと思います。

先ほどの近藤先生のお話にもあったように、若い人たちは「やってみたい」という潜在的な欲求を持っていると思います。ただ、場所や機会、それから、そういうことがおもしろいということが上の世代から伝わるチャンスがあまりにも少ない。だから、中秋の名月を一回も見たことがないし、言葉自体も知らないということになってくると思うのです。「感覚環境のまちづくり」は、そういう意味で、若い人の五感の力を育てることにもつながっていく、興味深いテーマではないかと感じています。

私自身は「五感」というテーマのもと、多くの取材・執筆をしてきましたが、今回こういう形で「環境省のまちづくり」に一步また踏み込み、感性・五感とまちづくりというテーマで現場を取材しました。これからその報告をしたいと思います。

先ほど滋賀県の彦根のお話がありましたが、彦根の対岸にある高島という地域では、五感の思い出を高齢者が一緒に出し合って、一つの大きな絵屏風を作っています。その絵屏風を巡りながらまた会話をし、高齢者と他の世代とが交流し、それがまちづくりにつながっていくという、新しい「ふくしのまちづくり」が始まっているそうです。五感体験の宝庫ともいえる高齢者の力を引き出し、活かしていただくという意味でも、感覚や五感というテーマはマッチしていることを実感しました。

その高島市で開かれたシンポジウムで、脳科学者の茂木健一郎さんが講演の中で強調されていたのは、「思い出すということは脳の手入れになる」ということ。過去の体験を想起することは脳にとってもいいそうです。が、ただ漠然と昔を思い出せと言ってもなかなか思い出せないですよ。しかし、暮らしの中にかつてあった匂いや手触り、音、味覚といった感覚的な記憶が入口になると、その人の過去の体験が生き活きと蘇って引き出されてくる。古い道具や歌などを使って高齢者の方々が昔を思い出すシーンを私も取材で何度も見てきました。

彦根のNPO五環生活では、自転車タクシー事業をされているようですが、そのタクシーに高齢者を乗せてお城の周りを回るといってもされているそうです。高齢者の方たちにとっては、特にお城についての思い出が非常に強いらしく、認知症があるおばあさんやおじいさんが、ゆっくりと動いていく自転車のタクシーに乗って、風が頬に触る感じや香りなどを感じているうちに、生き活きと昔自分が暮らしていた頃のお話しをされる、ということをお聞きました。

五感の体験・記憶はその人自身の土台、プラットフォームのような役割をする。様々な可能性につながりますので、ぜひ若い方にも五感の体験を耕していただきたいと思います。

ところで、お話しするだけや見ていただくだけでは、五感というものは伝わらないと思いますので、私は講演の時に色々な音を鳴らしたり、匂いをまいたりしています。今日は香りの展示がありますので、今から音を聴いていただきたいと思います。これは何の音か分かりますか？

(「ファーン、ファファファーン、ファファファーン」という音)

これは、奈良県「私のおすすめ 五感で楽しむ奈良」にも選ばれた音の風景です。鹿を早朝に寄せるホルンの音だそうです。奈良ではよく知られていて、「奈良の音の風景とは」ということで、こういう音がピックアップされたそうです。

もう一つ音を聞いてください。

(「カーン」という音)

皆さんがお住まいのそれぞれの地域で色々な鐘の音があると思いますが、これは奈良の興福寺の鐘の音です。このように、私たちの周りには色々な感覚の資源があります。

先ほどの「静岡市のいい感じサイト」ビデオを見て思いましたが、静岡市は感覚的な資源が豊かですね。やはり「ないものねだりから、あるもの探しへ」ということをしなければならない。これは地域学の方々も言っていますが、人が来ない、町が沈む、過疎が進むということを嘆いて、ないものをねだるのではなく、もう一步進んで、「あるもの探し」をする。五感・感覚を働かせることで、すでにある地域の価値、非常に豊かな感覚資源が見つかるのではないか、それらを探していこう。これがまず「感覚環境のまちづくり」の入口になると思います。

奈良の事例をご紹介します。先ほどお聞きいただいた音もそうなのですが、「私のおすすめ 五感で楽しむ奈良」という企画を県の観光部局が行いました。五感で楽しむ奈良にはこういう感覚的な資源があるよ、こういう音風景がおもしろいよ、こういうかおり風景が心地よいよ、というのを広く公募しました。

そうしましたら 2,200 件を超える応募があり、そこから 108 件が選定されました。先ほどの鹿のホルンとか、鐘の音とか、おそば屋のにおいとか、お線香、お水取りのときの松明の匂いとか、触れて楽しむものも含め、奈良特有の感覚的な資源がたくさんあるということが分かりました。

なぜ奈良県がこんなプロジェクトを行ったのかをお聞きしましたところ、「それまでの奈良のイメージは絵はがきの風景に偏りがちだったが、もっと色々な資源があるのではないかと考え、それを掘り起こしたいと考えた」とのことでした。その結果、2,200 を超える応募があり、様々な豊かな感覚資源があることを自覚できたということです。

一方、市民活動においても、すでに奈良まちづくりセンターが、まちづくりに「五感」というテーマを持ち込んだプロジェクトに取り組んでいました。奈良まちづくりセンターは、まちを歩きながら、自分たちがどのように五感で感じているのかを調査して、その中からまちの豊かさを発見し、色々なプロジェクトに広げていくという試みもされていました。

この事例集では、そのような個性的な取組を 10 事例集めております。皆さんに一つの参考としてご活用いただければと思っております。

それでは、どのようにまちづくりに取り組んでいけばいいのかを考えていきたいと思えます。今まで私たちが暮らしてきたまちでは、機能性や効率性の視点から、例えば、真っ直ぐな道路や、より多くの活用できるスペースといったことが考えられてきましたけれど、「心地よさ」という視点から見るとどうなのか、もう一度検証してみる時代に入ってきているのではないかと感じます。

また、「まちづくりはハード中心の発想からソフトウェアの活用へ」ということで、現在、建物などの箱物や道路の建設とは違った方向へまちづくりを進めなければいけないと言われてきていますが、その時には、このまちにはどのようなソフトウェアがあって、その中にどのような心地よさがあるのか、特に言葉にはなっていないが確かに感じる要素、音や匂いや光といった豊かさをどうやって発見していくのがテーマになってきていると思えます。

環境行政も、悪臭や騒音といった問題への対処から、より心地よいかおり環境や音環境を提案する、という方向に踏み出そうとしています。平成 19 年 6 月に閣議決定された「21 世紀環境立国戦略」では、持続可能な都市づくりの一環として、ヒートアイランド対策の観点も含め、風の通り道や景観、水と緑あふれる美しいまちづくりという方向性が示されています。

これは感覚環境とは何かを説明している図です。悪臭から良い香りへ、騒音から賑わいや自然の音の良さへと、問題対処型からより良い環境にするための提案型に一步踏み出していこうということです。

感覚環境のまちづくり検討委員会は平成 18 年から始まり、熱、光、かおり、音の各分野に分かれて議論し、報告書をまとめました。その流れを受けてこの事例集を作成しました。ヒートアイランドや地球温暖化についてはこれまでに問題とされてきていますが、不快な暑さに対して、ヒートアイランド対策や温暖化対策という「問題対処」から、さらに一步進めて、「涼感を楽しめる

心地よい空間を作っていこう」と提案する方向に行くことができれば、まちは非常に豊かになってくるのではないかと思います。

ここからは、事例集の中から可能な範囲でいくつかご紹介したいと思います。

これは島根県の宍道湖・中海という淡水と海水が混じり合う非常に豊かな環境のある場所で、シジミ漁が有名です。この宍道湖・中海を五感でモニターしてみようという島根県の取組です。

なぜ環境をモニターするために「五感」を使うことにしたのか、を県の担当者にお聞きしたところ、これまでの行政では、例えば水を測定した結果をデータとして公表し、これだけ状態が悪いとか、良くなったと説明してきたが、数字で提示したことが、住んでいる方にどのくらい伝わっているのだろうか、体感的に今宍道湖がどうなのかを数字以外で伝える方法はないだろうかということで編み出したのが、この「五感モニター調査」だったそうです。

この表を見ていただくと、「見る」ではゴミが少し見あたるとかたくさんあるとか、「聞く」ではうるさく感じる音だとか気にならない音だとか、五感による指標を作り、市民がこれを用い、自分の測定地点を決めて、例えば1カ月に1回というような形で持続的に点数をつけるという取組をしてきています。それがまとまってくると、五感で湖の状態を理解する一つの指標、目安として使えるようになってくるという訳です。

この事例ですごいなと思ったのは、この指標の内容を作りあげるところで、市民の参画も得ながら議論してきたということです。そしてさらに、それを使って点数をつけていく訳ですが、一つ非常に大きな収穫があったと聞きました。それは、この取組を通じて、住んでいる人と宍道湖・中海との距離がとて近くなったということです。自分の体のセンサーで水を見てみたり、触ってみたり、匂いを感じてみたりということを繰り返す中で、かつて自分がここで水遊びをしていたとか、その頃の湖と自分との親しい関係が戻ってきたと言う人が出てきた訳です。また、お年寄りでは昔に戻った感じがするそうです。かつては遊んでいたとか、泳いだとかといったことがたくさんあったそうですが、水質が悪化していくと、水に触らなくなり、遠くからちょっと見るだけになった。それでも何となく一緒に暮らしてきたと思っていたと。しかし、実際に触れることにより、かつてここで遊んでいた体感などが蘇ってきた。これは非常に重要なことだと思います。

「人々の関心がなくなるとどんどん環境も悪化していく。逆に関心が高くなると、その環境自体も状態も良くなっていく」という関連性があるとも伺いました。五感モニター調査は、環境の状態を測ると同時に、もう一度自分の暮らす場所を再評価し、どれくらい感覚的に豊かなものがあったのかを、それに気づかないで暮らしていた自分たちがもう一度評価するきっかけづくり

にもなることです。このように点数を集計し、一覧できるような形で図にもされています。

静岡駅前には、科学館「るくる」というものがありますね。みる、きく、さわる、の語尾をとって「るくる」。知覚・感覚を使って感じることの面白さに、科学的なアプローチで気づくことができる施設ですが、子ども達がパスを持って繰り返し遊びに来るそうで、リピーター率がとても高いらしいですね。なぜかという、自分の体で遊ぶ施設ですから、毎回違う結果が出たり違う発見があったりして、飽きることがない。真っ暗闇の迷路もあり、近藤先生の「まっくらカフェ」とも通じる場所がありますが、そのような色々な発見が繰り返される楽しさがある施設がすでにみなさんの地元・静岡市にもあるということはすばらしいです。

同じ静岡県内の浜松市では、「音・かおり・光資源百選」という取組をされています。これも事例集で取り上げておりますので、ご紹介したいと思います。

浜松市では、感覚的に心地よい資源を集めた「音・かおり・光資源 100 選」を選定しました。それに先だって、平成 16 年に「音・かおり・光環境創造条例」という条例を作っています。潤いや安らぎを与えてくれる音・かおり・光資源の保全、それから悪臭や騒音といった感覚公害の防止を目的とした、日本でも唯一の条例なのですが、条例による規制と豊かな資源を集めてその良さに気づいてもらう百選の両面から取り組まれているということになります。

浜松は楽器のまちですから、そういう意味でもまた独自性を持ったいろいろな音風景があります。かおり資源では、フルーツとか風とか、光資源だと弁天島浮見堂などが選ばれています。現在、環境資源百選という形で看板を設置して、これらを巡れるような整備も進められているそうです。冒頭で申し上げたような「ないものねだりではなく、あるもの探し」の視点ですね。感覚的な環境資源、心地よさを感じるものというのは、様々に発見できるかと思います。

さて、今日はフレグランスコンテストの表彰や展示もされておりますので、香りのまちづくりをしている松本市の事例をピックアップいたしました。

環境省が全国から選んだ「かおり風景 100 選」の中に、シナノキの香りでいっぱいになるという大名町通りという松本市内の通りがあります。また、環境省の「みどり香るまちづくり企画コンテスト」で、松本市の奈川地区というところで香りの樹木を植え、その香りの樹木にチョウが来るとい企画が環境大臣賞を受賞しました。その奈川地区は、野麦峠の山の中で、行くのがなかなか大変なところでしたが、そこにチョウの食樹を含む 15 種類の香りの樹木を植えて、たくさんのチョウをよび寄せるといものでした。このような山の中だから可能だった企画なのではないかと想像し、担当の方にお聞きしたのですが、「いや、実はこれは松本の市街地でやりたかった。今回は条件がそろわなかったが、条件を整えることができれば住宅地にある公園でも十分にでき

ると思う。」という意外な答えが返ってきました。チョウは都会でも飛んでいるそうですので、大都市でも可能なのだそうです。

チョウは飛ぶルートが決まっていて、そこをたどって香りの木に集まってくるので、そこで色々な植樹をするという、香りと自然の生態を重ね合わせたかおりのまちづくりの企画も可能であるということをお教えされました。この「かおりとチョウの森」では、色々な香りの樹木が植樹され、かなりの種類のチョウが集まってきていました。松本は感覚環境を熱心に取り組まれているまちで、昨日の「星空の街・あおぞらの街全国大会」も市制 100 周年だった一昨年で開催されたそうです。

最初に申し上げたように、感覚環境のまちづくりという概念自体は新しい概念ですが、このように五感を使って自分のまちの豊かさを感じとり、みんなで評価し、まちづくりにつなげていこうという取組は、様々に行われているのです。色々な場所で色々なアイデアがあり、それをつなぎ合わせたり参考にしたりすることで、新しいまちづくり、特にソフトウェアを活かして、かつそこで暮らしている人たちが自分たちの場所を楽しんだり肯定的なものを持つという形で、まちづくりは変わるのだなと感じました。

次の事例は「大丸有」という、大手町・丸の内・有楽町を総称した東京駅周辺です。ここでは涼感を楽しむまちづくりという取組がなされています。最近非常に暑いですが、どうやったらこの暑いまちで暮らしていけるのか。温度を上げないということも大切ですが、もう一步踏み込んで、涼感を楽しむ、あるいは涼感を産み出す、演出する取組を行っています。

これは壁面緑化の事例です。また、暑い時期にみんなで打ち水をやったり、屋上を緑化したりということで、涼感を楽しむクールシティというところにまで持っていこうと様々な工夫がされています。

「風の道」は、東京湾から吹き込んでくる海風を活用し、風を楽しむまちにできないだろうかということで、整備が進められているところです。隣の皇居の方からにじみ出してくる冷気を活用しようということも考えられています。

大阪でもクールシティづくりの取組が進んでいます。川をうまく使ったり、ルーバーを用いて建物の蓄熱を減らしたりといったことが、クールシティ中枢街区パイロット事業という環境省の補助金事業を活用して進められています。

これは霧状のミストが噴霧される装置です。大阪の中之島のところで撮ってきた写真ですが、大丸有にもあります。このようにして涼感を楽しもうとするプロジェクトも進んでいます。

やはり、そのまちの感覚的な DNA をもう一度しっかりと掘り起こしたり、見直したりするとい

うことがとても大切だと思います。大阪で取材していた時に江戸時代に小西来山という人が作った俳句を知りました。大阪では多くの人知っている有名な俳句だそうです、「涼しさに 四ツ橋を四つ わたりけり」と言いまして、この川のここに四つの橋が架かっていた、あまりに涼しくて気持ちがよいので、つい四つの橋を渡ってしまった、ということ詠んだ句です。かつて大阪は「八百八橋」と呼ばれるほど橋がたくさんある水の都で、その水の都の心地よい遺伝子がこの句一つで伝わってくる。いかに大阪は気持ちいい涼感のまちだったかということがこの絵とこの句一つですぐに分かるということ、土木工学の先生から教えていただきました。

もちろん、すぐに道路を掘り返して元の川に戻せというのは無理な話かもしれませんが、かつてあったまちの姿を参照にして、自分たちのまちを再評価し、どこに持っていかうとするのかを決めていくということが問われているのではないかと思います。

アスファルトを掘り返して橋にするのは無理だろうと今、申し上げましたが、そういえばお隣の韓国のソウルでは実際に行われています。ソウルを中心に流れる清溪川（チョンゲチョン）という川は、かつて蓋をされて道路となり、その上を高架道路まで通っていましたが、現在大統領の李明博（イミョンバク）さんが市長だったときに、これを壊し、川を覆っていた蓋も全部撤去して、川を復活させました。ですから、日本でもできないということはないかも知れません。

これまで申し上げてきたように、まちを評価し、もう一度見直して作っていく時には、感覚・五感という要素が非常に重要です。

そして、「ないものねだりから、あるもの探しへ」です。五感を使ってそのまちの魅力を発見していく。一人一人感じ方は違いますが、それをまた大切にすべきだと思います。五感や感覚で感じることは一人一人バラバラだから、まちづくりには合わないと言われる方もいらっしゃるのですが、本当にそうなのだろうかと再度問い返してみたいと思います。上から何か一つのものを押しつけるのではなく、感覚的な共感というものがそこに暮らしている人たちの中にあるのではないかと。それを活用することもまちづくりの一つの大切な視点ではないかと思います。

一つ例として、富士山があります。富士山を見て不快だなと言う人はどれくらいいるでしょうか。一方で、富士山が好きだとか、きれい、いいよねと言う人は多いのではないかと思います。それは、私たちの感覚的な経験であり、日本という風土の中で暮らしてきた生活文化の履歴が重なり合って一つの感覚的な価値を作り出している。それは多くの人に重なることもまたあり得る。

先ほどの近藤先生のお話の中で、つながりが失われてきているということがありましたが、「感覚的共感」という意味で、失われつつあるつながりをもう一度つなぐということと同時にまちづくりの中でできたら面白いなと思います。

なぜこれは心地よいのか。もちろんなかには、例えばご家族が富士山で遭難したような経験を持っている人はとても心地いいなどとは言えないといった個人的な違いはたしかにあります。しかし、多くの人が同じようなある種の心地よさを感じてしまう要素もまた、まちの中に潜んでいたりする。彦根城を見ると高齢者の人たちが生き生きとして語り出してしまうような感覚的な共感があると近藤先生から聞きました。そうした魅力的な感覚資源を見つけ、共感を紡ぎ直していくのが、新しいまちづくりの一つのヒントだと思います。

「心地よさ」の共感と言えば、例えば、カップルが座ると大体同じぐらいの間隔を空けて座ることから、心地いいカップル同士の距離というものがあるのではということを知ったりします。また、黄金比や白銀比のような、多くの人が心地よく感じる比率というものもあります。日本では白銀比と言いまして、「 $1:\sqrt{2}$ 」というサイズが基本のモジュールになっている。四畳半や八畳など和室空間の基本の一辺と対角線比をはじめ、用紙や建物など多くにこの比率が使われているそうです。日本人はどうもこの比率が心地いいと感じる共通の感覚を持っているのではないかと指摘されています。あるいはこれまでずっと使われてきて馴染んでいるから気持ちいいとか美しいと感じるのか、どちらが先か分かりませんが、法隆寺のシルエットや文庫本のサイズなど、色々な場所にこの白銀比というものが見られるそうです。それはきっと心地いいという、ある感覚的な重なり合いがあるのではと思いますが、そういうことをまちづくりの中で探していくのも面白いのではないかと思います。

まとめますと、まず、自分のところには何もないとか、観光資源がないから客が来ないといった思い込みがあちこちで見られるのですが、五感・感覚を使うということで様々な価値、豊かさ、心地よさ、面白さといったものが発掘できるということです。そういうことを調査する、発見する方法論についても、先ほどの宍道湖の例が参考になりますし、彦根のNPO 五環生活でされている取組の中にもいろいろあると思います。

そして、「感覚的共感」というものを見つけ出していくのもまちづくりの一つのテーマだと思います。

「感覚環境のまちづくり」を進めていく時に、すべてのベースになるのは、一人一人の体、つまり、感覚・五感を使って、あらためてまちを感じて直してみることはないかと思います。まずそこからさまざまな発見が生まれます。何もないと思っていたまちに、たくさんの魅力的な要素があることが、発見できるでしょう。発見したら、今度はどのようにその資源を活かしていくか、保存したり活用したりしていくのか、を地域の人々の合意を作りながら考えていく。

若い人の感覚が鈍くなったという議論がありますが、若者だけの問題ではなく、大人たちが五

感・感覚を意識して使うチャンスを作ることで、まちは必ず変化していきます。若い人たちはまだまだ鋭敏なセンサーを持っているのにもかかわらず、使う機会がないために使い方が分からないのではないかと思いますので、そういった経験をすることを促していけるようなまちづくりができれば、まちが活性化していくのではないかと考えています。

私の話は以上です。ありがとうございました。